小補匠材集解說

岡田希雄

一

匠材集四卷は、歌や連歌の用語約三八一五語を集め、色葉四十七部に分類し――四十七部は皆存しても、假名遣までも正しいと云ふのでは無い――簡單な注を施したものであつて、連歌の附合用の參考書である事は、自序に詳しい。書名の說明もある。

松の葉の散りうせぬ神代よりこのかた、人の心に傳へて、世々のもてあそびぐさとなりぬるは、和歌の道にしく事はあらじ、されば連歌にも六十二體を學びて無盡の作意を求むるといへ共、定れる詞をもつて心の新しきを願ふべし、上古の先達も今の世にも詞材を集めて、匠の墨繩にあてゝ煩はしきふしを削り、正鳳に歸すべし、此ゆへに是を匠材集と名付はんべる也

連歌用のものではあるが、連歌の制約を記入する事は少いから一種の雅語辭典と云つても可い。紹巴も和歌用のものと見て居る。斯くの如く序文があり乍ら、署名も無いので作者も時代も不明だが、

さゝ波やにほへる海の邊にかりのすまゐせし折節、
或人此一冊を袖にし來る、予是を見るに、そのかみ
誰人のしわざといふ事をしらねども、和歌の浦にこゝろをしづめん人は、功不功をいはず、此詞によらずんば有べからず、しかれば末代の重寶たるべき間
染筆者也

慶長二年三月上旬　　法眼紹巴

と云ふ識語があるので、天和元年新增書籍目錄、元祿書籍目錄、合類書籍目錄大全、國書解題などは里村紹巴の作とし、現在でも山田博士の「連歌及び連歌史」一六頁は、紹巴が配流せられて三井寺に籠居して居た際に編したのだらうと記して居るが、此の識語を味はへば、紹巴が、自作であるのに僞りて斯く書いたと見るならば知らず、

さも無くば、紹巴はたゞ轉寫して識語を加へたゞけである事は明かである。元祿五年五月に出來た「しをり萩」の跋に、右の紹巴の識語を引いて「此書の久しき事、紹巴すら猶その來由をきはめ給はず」と云つて居るが、これが眞相であらう。「このてかしは」の條に宗長の說を引くから、其れよりも後のものか。序ながら紹巴が「にほへる海の邊にかりのすまゐ」したのは、普通、關白秀次の事に關し、秀次が文祿四年七月自殺した時、秀次の眷顧を得て居た紹巴までが、秀吉の怒に觸れて三井寺に三年間蟄居を命ぜられた事だとせられて居るが、淺田善二郎氏紹介の「文祿二年八月二十五日紹巴法眼被配流歸洛之時於關寺興行」百韻に據ると、紹巴が配流せられて居たのは、文祿二年八月までの事と成るのである。匠材集はかなり行はれたらしい。川瀨氏の「古活字版の研究」に元和・寛水中のものとして一頁十三行本と一頁十四行本とを擧げ、前者には同種活字の異版が三種あるとして居る、何れも横本である。整版としては「寛永丙寅孟夏日　杉田勘兵衛刊行」（丙寅は三年）本、「寛永拾五年孟夏吉辰刊行」本、「慶安四辛卯曆仲秋」京秋田屋平左衛門版などがある。活版本としては、古典全集第五期新收本が昭和十一年十二月に出た。

二

匠材集は和歌連歌の用語たる雅言の色葉分注釋書であるが、歌や連歌を作る人としては、或る俗語をば歌や連歌用の雅言では何と云へば可いかを知りたく思ふ場合が多い筈である。然う云ふ人に取りては、口語俗語を先づ擧げ下に雅言を注したやうな色葉分辭書があれば好都合であるだらう。ところが、或る特志家がありて、然う云ふものを作つたのである。其れが今紹介せんとする小補匠材集四卷横本四册の寫本である。

此の本は、今年四月の阪急百貨店の卽賣會の時、洋裝本の中で見出して手に入れたものだが、四寸五分五厘に六寸六分程の横本で、唐紙の題簽には「小補匠材集一（二・三・四）」とあるので、匠材集の寫本とは珍しい、匠材集を少し增補したものかと思ひつゝ手に取りて見たところ本文は普通の匠材集とは全然異り、紹巴の識語も無けれ

ば、序文も無く、普通の序文にかはりて、別種の序文が存し、此の本の性質や成立を物語つて居るのであつた。共の序文は左の如くである。（假名遣は本のまゝ、濁點や句讀點は今施す。）

豐蘆原の歌は、久堅のあめにしてはしたてる姫にはじまり、あらがねのつちにしては、すさのをのみことの八重垣の雲のことなる色におこりて、今呉竹のすゑの世に至るまで、雲の上はさらなり、下つかたの人までも、和歌の浦に心をしづめ、玉津島の浪ながく住吉の松も久しくなむ思ひをのぶるといへどもしき嶋の道は、伊勢のうみきよきなぎさの玉はひろふともつくる事なく、いづみの柚の宮木はひくとも猶しげし、青海原のはてしなき事ながら、いさゝかも難波津のながれをくみ、淺香山の跡をしたひ、あるは撰集に心をうつし、あるは物語なんどのたぐひにても手にふれ、しかはあれどつたなきこゝろなれば、いかで三十字一文字もつゞけゑがたく、年月をふるまゝに匠材集とて、四十八の以呂波假名をすえて、萬の物の異名、又は枕言葉などの上のかなの四十八字にあたりたる所〳〵に書あらはし、その下に品〳〵をかきのせたるものあり、誠にひが〳〵しき心、扨はいわけなき人の手習ふべきには、はなはだよろし、さはありながら、たとへば月花の異名にても知らむとするに、尋がたし、然にまかせて、異名まくら言葉を下にかき、もろ〳〵の物を上に書のせ、匠材集のおきてをあらためずして、四十八字を書出し、そのかなにかなひたる所〳〵えしるし、すなはち小補匠材集と名付、寛文一十年あまりひとせの二月時正の折節しるし侍るものならし

以呂波四十八字と云つて居るが、無論四十七字とある可きだ。「手にふれ」の下、脱文があるらしい。寛文云々の所、「ひとせ」は「ひとゝせ」の誤にて、寛文十一年二月に作つたと云ふのであらう。年月を書きながら、署名の無いのは遺憾である。此の著者も、匠材集をば、連歌の書とは見ずして、和歌用語の書と見て居る事、紹巴と同じである。

三

さて本文の體裁の一斑を「は」部のはじめの所で示すと左の如くである。

はいくはいする事　いさよふ波
はかまのこしの事　いもひも
胎みた時膚にする帶の事　いはたおひ女の膚にする帶也
腹立いかる體の事　いきまきいきまくとも
はた板の事　いたかき
はや人の事　いぬ人
はやの事　いとはやも最早也
播磨のいなこ川の事　いなむの川
八月十五日八幡の御神事の事　いけるおはなす
腹の惡敷鷹の事　いらこの鷹

これらは匠材集では左の通りに成つて居る。

いさよふ波　はいくはいする心也
いもひも　はかまのこし也
いはたおひ　女のはたへにする帶也、又はらみたる時はたへにするともいふ
いきまき　腹立いかる體也、又いきまく共云
いたかき　はた板也
いぬ人　はや人なり
いとはやも　はや也、最早也
いなむの川　播磨のいなみ川也
いけるをはなつ　八月十五日八幡の御神事也
いらこの鷹　はらのあしきたか也

全く同じであり、「いなみ川」が小補本では「いなこ川」に誤られて居り、「いける。おはなす」に小異あるだけである。しかして、匠材集、「い」部に於ける語注で「は」を語頭とするものは、これが全部であり、順序まで一致する。任意に他部を檢するに皆同じである。又匠材集中の譯語を任意に取りて小補本に存するか何うかを檢するに（括弧の中は小補本の部名）

いづら　どりやといふ事也（ど部）
はらから　兄弟也一腹也（け部）
はしきやし　女房也、又あひする心也（ね部）
はまゆふ　三熊野の浦に有草也、彼紙の樣にへくるもの也（み部）
はしきよし　朝參と書、御門の御本にゐるをいふなり（み部）
にくさ井　船に有事也、風つよき時ろ二つ結付を云（ふ部）

とようの寺　大和に有（や部「大和に有事、とようの寺」）

ところほる　拾遺に春野によむにがき物也（し部）

庭のをしへ　物の本の名也（も部）

とつなのはし　親際手綱を取て渡也、まことの橋にはあらず（古典全集本（し部）

観際に作るは非）

をそのたはれ　川うそ始はたはれ後くひ合物なり（か部）

の如くに見える。だが匠材集には

いほはた　五百機と書也

とにかくに　左右と書也

はあかる玉　羽明玉と書也

の如き漢字を當てる事を敎へたもの

橋柱のちかひ　司馬相如位のぞむにかなはずば歸らじと橋ばしらにかき付るなり

佛の出難波　津國にあらず、大和の難波堀江也

鴛聲する　うたひ物にや、又聲を穂に出といふ心也

さつゆみ　弓は兵具の中にさときものなればいふなり

の如き類のもの

とりすら　すらはやすめ字也

いくち山　石見の名所也

の類のものなどが多いが、是れらは、下段の說明から上段の語を求める樣に書くのに困るから、此の儘にして採用して居る。中には

年のを　たゞ年をいふ、をは置字也

の如く、小補本に見えぬものもある。尤も名所に關した場合には

石見の名所の事　うすたの山

石見の國の事　たかつの山（高角山と書）

同國に有事　たゆらき山

の如き風に擧げて居る事もある。

要するに、少數の除外例は無論あるが、大體を云へば、匠材集の注解の部分を語頭音により色葉順に、忠實克明に拾ひ行きて上段に記し、其の下に注解せられて居る原語を書いて行つて、匠材集の正反對の一書としたのが、小補本である。從うて、小補本の下段は「い」「ろ」「は」等各部の中が、又色葉順に成つて居るのだが、其れらを檢して行くと、順序の正しく無い語が極めて少しだが存する事に容易に氣づく。例へば

灯の事　九つの枝
はゝのかほの事　見もた
はかなき事　水に數かく
篠田の杜に有木の事　ちゑのくす
三種の神寶の事　三草のたから
さし越て待心の事　またく心

の如きであるが、整理の不充分に基くのであらう。

四

本は一頁九行、いろは四十七部が存するが、假名遣は無論駄目である。第一冊は「い—か」序文三丁、本文六十七丁、第二冊「よ—の」五十一丁、第三冊「お——あ」六十六丁、第四冊「さ—す」六十三丁、書名は四冊の各題箋と、序文と、第四冊の尾題「小補匠材集全編終」とあるとに見えるだけである。全部一筆で極めて見事な筆蹟である。序文に誤字脱文があり、本文にも、「は」部に

蜂を拂ふ時うそ吹事　けちふく（○はちふくの誤）
稻に出初る色の事（ほ部、稻は穗の誤）　ますほの薄

の如き誤字もあるが、他にもあるだらう。此の誤字が別人の轉寫する時の誤寫であるか、著者が草本を清書する時の誤寫であるかは判りかねるが、本は保存が良すぎて手澤と云ふ樣なものが殆んど無いけれど、（尤も表紙は、甚しく荒れて居る、非常によく使用したものらしいが、本文に手垢など殆んど無いのを見ると、大事に取扱うたらしい）寛文頃の書寫と見るに不可能であるとも思はれない。とにかく、轉寫本であるにしても珍しい本である事は爭はれない。

五

さて本書は匠材集の組織を變へたゞけのものであるから匠材集を中心にして云へば、有つても無くても同樣と云つて可いが、しかし、其の組織を主眼として云へば、國語辭書史上では、斯くの如く、俗語、口語、注釋語より雜言を求める辭書は、從來は無かつたのであるから——或ひは存したかも知れない、又存して居るかも知れないが、其れは知られて居ない、蛭見によれば小補匠材集が最古のものである——此の點での歷史的價値は大きい。其の本書の歷史的價値を示すために、本書以後に出た此の種の書を年代順に擧ぐ可きであるが、其れでは時代の新しい本の事を述べる事と成り、本誌の性質上好ましからざる事であらうと思ふから、其れは省略して、本書の紹介の筆を擱く。（七月二十七日）